

マツゲン箕島 4強逃す

クラブ野球 好機あと1本出ず



岐阜県で開かれている第45回全日本クラブ選手権は30日、西近畿地区代表のマツゲン箕島が準々決勝で全足利クラブ(栃木)と対戦し、0-2で完封負けした。好機にあと1本が出ず、2019年の前回大会(20年は中止)に続く優勝はならなかった。

【加藤敦久】

スタンドでマツゲン箕島を応援するチーム関係者ら一岐阜県の大垣北公園野球場で

▽準々決勝	全足利	00020000000000
	マツゲン箕島	00000000000000
	(全) 中田・岩崎(〇) 坂田・小谷・森・藤本(△) 三壘打 松本(全) △二塁打 山口・池島(△)	

には、選手の家族やスパーマーケットを展開する「松源」の桑原太郎社長(41)ら約20人が駆けつけ、熱戦を見守った。

試合は三回、先発の坂田颯投手(26)が連続四死球からピンチを招き、2点を失った。その後は互角の投手戦となるが、攻撃では三回から六回まで走者を出しながら好機を生かせない。

3番・夏見宏季選手(27)の父和宏さん(64)は「息子はひびきを故障し、痛み止めの薬を飲みながら頑張っている。チームは終盤に逆転してくれるはず」と応援。九回に先頭打者の夏見選手が会心の右前打を放って出塁する

とスタンドの期待が高まったが後続が倒れた。

西川監督は「若いチームで、先に点を取られて焦りが出てしまった」と分析。近畿のライバル・大和高田クラブ(奈良)が、新型コロナウイルスのPCR検査でチーム関係者が陽性となり大会直前に出場を辞退したことに触れ、「その分も、という思いもあったので悔しい。気持ちを切り替えて、都市対抗予選へ練習していくしかない」と巻き返しを誓った。

小谷琢真投手 (23)

入団2年目で、元々は右

任された大舞台で、パワーピッチングもできることを証明してみせた。

上手からスライダー、フォークなど変化球でかわしていくタイプ。だが、最近はいくタイプ。だが、最近は練習試合で速球を絡めてゼ口で抑えることが多くなり、西川監督も「今年になって良くなってきた選手」に注目していた。この日は

【加藤敦久】

チームの試合前の構想よりイニング早く、急ぎ五回からリリーフを命じられた。全足利クラブは全日本クラブ選手権で最多、10回の優勝を誇る強豪。2点を追う展開で、もう1点も与えられないと分かっていたが、臆することはなかった。ブルペンで速球が走っているのを実感していたからだ。

相手打者の打球は詰まり、「楽に投げられている」と自信を深めた。伸びのある速球を主体に六回2死2塁のピンチも三振で切り抜ける。八回は4、5番を連続の空振り三振に仕留め、4回被安打2、無失点で役目を果たした。

速球勝負 4回無失点

